

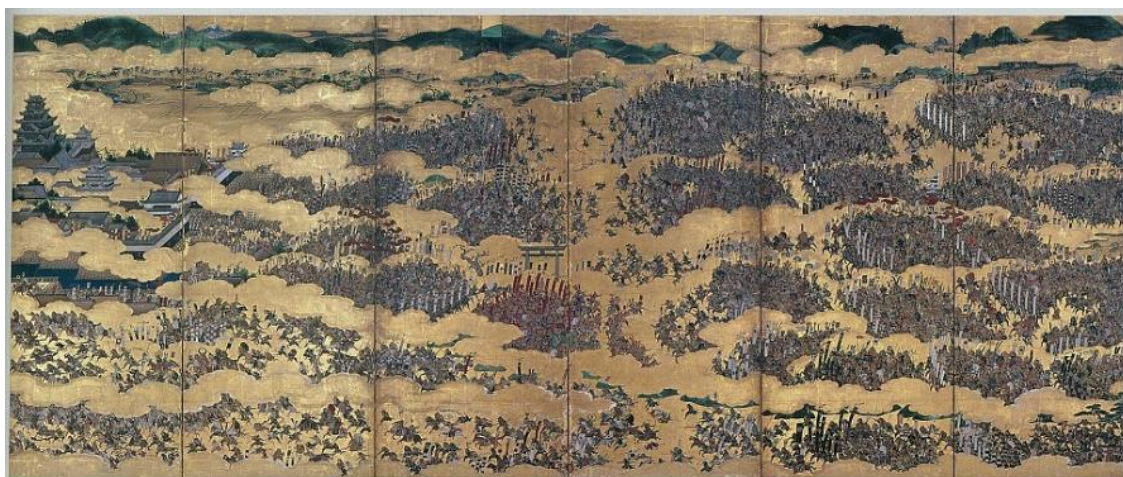
## 主要展示品解説

### 1 重要文化財 大坂夏の陣図屏風<sup>びょうぶ</sup>（出品番号 49）

#### 大阪城天守閣蔵

慶長 20 年（1615 年）に起きた大坂夏の陣。中でも 5 月 7 日の最後の決戦では、徳川方 15 万 5 千人、豊臣方 5 万 5 千人という大軍が大坂城の南方を舞台にぶつかりあい、その結果大坂城は炎に包まれて落城した。翌日、豊臣秀頼とその母淀殿が自害して豊臣家は滅亡し、これにより徳川幕府の天下統一が完成した。この屏風<sup>びょうぶ</sup>は、徳川方として参加した福岡藩主・黒田長政が、夏の陣が終わって間もなく描かせたものといわれている。

左右一組となっているこの屏風<sup>びょうぶ</sup>の右側すなわち右隻<sup>うせき</sup>には両軍激突の様子が、左側すなわち左隻<sup>ひだりせき</sup>には落ち武者や避難民たちの逃げまどう様子が描かれている。戦国合戦を描いた屏風<sup>びょうぶ</sup>絵の中でも最高傑作とされ、近世初期の風俗画としても高く評価されている。昭和 6 年（1931 年）に復興された今の大阪城天守閣の外観は、この屏風<sup>びょうぶ</sup>に描かれた天守にもとづいている。



うせき  
(右隻)



うせき  
(右隻、大坂城部分)

## 2 川中島合戦図屏風<sup>びょうぶ</sup> (出品番号 40)

大阪城天守閣蔵

武田信玄と上杉謙信が、北信濃の支配権をめぐる死闘をくり広げた川中島合戦は、天文22年(1553年)から足かけ12年の長きにわたり、その間、5回の戦闘があった。なかでも有名なのは4回目、永禄4年(1561年)の激戦である。このとき上杉謙信が、みずから武田信玄の本陣に突入。馬上から刀で信玄に切りかかると、信玄は手にしていた軍配団扇<sup>ぐんぱいうちわ</sup>で、とっさに刀を受けとめたと伝えられている。

本品はその第4次川中島合戦を主題にしたもので、中央には謙信と信玄の一騎打ちのシーンが描かれている。本品は戦国大名の中でも代表的な2人を描いた迫力満点の絵画資料である。

初公開。



(信玄と謙信の対決部分)

### 3 重要文化財 南蛮屏風<sup>びょうぶ</sup> (出品番号 52)

#### 大阪城天守閣蔵

日本では、外国との交流が活発化した 16 世紀から 17 世紀にかけ、高まる西洋への関心を背景に「南蛮屏風<sup>びょうぶ</sup>」とよばれる絵画作品が、主に狩野派の絵師たちによって各種製作された。これらのほとんどは、交易のためアジア各国にやってきたヨーロッパ人、主にポルトガル人の上陸をテーマにしている。本作品はいくつかの系統のうちの一つを代表するもので、狩野孝信が描いたとする説が有力である。

右側の屏風<sup>びょうぶ</sup>すなわち右隻<sup>うせき</sup>は日本の港を想定したもので、カピタンとよばれた船長一行が様々な品物を携えて上陸し、イエズス会宣教師の出迎えを受けている。また民家から日本人の親子が珍しげにそれを眺めている様子も描かれている。左隻も同じく南蛮人の上陸を描いているが、こちらは人々の身なりなどから、中国の港を想定したものと考えられる。

※本品は展示期間を 6 月 21 日 (金) から 7 月 4 日 (木) までとします。



うせき  
(右隻)

うせき  
(右隻、上陸するカピタン部分)

#### 4 うんすんカルタ<sup>はりまぜびょうぶ</sup>貼交屏風 (出品番号 67)

大阪城天守閣蔵

現在のトランプにあたるカルタは、桃山時代にポルトガルから伝えられた。当初は 4 種の札各 12 枚、計 48 枚で遊んだが、のちには 5 種の札各 15 枚、計 75 枚が 1 組となる。この 75 枚セットのカルタを「うんすんカルタ」と呼んでいる。

本品は御簾<sup>みす</sup>を描いた屏風<sup>びょうぶ</sup>に実物のうんすんカルタ 33 枚を貼交としたもの。豊臣時代におけるヨーロッパ文化摂取の潮流を示すもので、東西文化が融合した斬新なデザインが見どころである。

初公開。



(部分拡大)

5 鉄二枚胴具足てつにまいどうぐそく（伝 真田幸村所用）（出品番号 70）

大阪城天守閣蔵

戦国武将の中でとりわけ人気の高い真田幸村が着用したとされる鎧。胴の部分は鉄の板を2枚つなぎ、ヨーロッパの甲冑を意識した作りになっている。こうした西洋風の鎧を「南蛮具足」と呼ぶ。

真田幸村は信濃国しなののくに、今の長野県上田市を本拠とした戦国大名、真田昌幸の子である。豊臣秀吉に仕え、秀吉の死後に起きた関ヶ原合戦で徳川方に敵対したため、戦後配流生活を強いられた。その後政治の実権は豊臣から徳川へ移り、慶長19年（1614年）に両家の対決が不可避になると豊臣家の招きに応じ大坂城に入る。そして同年に起きた冬の陣においては、真田丸を築いて徳川軍撃退の大功をあげ、翌年に起きた大坂夏の陣では徳川家康本陣に突入して、家康をあと一歩のところまで追い込んだものの、壮絶な討死をとげた。

この鎧の「籠手かごて」とよばれる腕を保護する防具の手の甲の部分には、真田家の家紋「六連銭ろくれんせん文」が打ち出されている。



6 のぼりぼしごもんかわづつみにまいどうぐそく昇 梯子文革包 二枚胴具足 (伝 真田信之所用) (出品番号 11)

大阪城天守閣蔵

16 世紀から 17 世紀にかけて活躍し、今の長野市内、しなののくにまつしるはん信濃国松代藩の初代藩主となった真田信之の鎧である。信之が若いころに使用していたもので、あわせて伝来した付属資料には、江戸時代前期の大老、酒井忠清の嫡男に信之が贈呈した、と書かれている。

真田家は今の長野県上田市を本拠とした豪族で、信之の父昌幸の代に豊臣秀吉から大名として認められた。秀吉没後の慶長 5 年 (1600 年) に起きた関ヶ原合戦で、信之は父昌幸、弟幸村とたもとを分かって徳川家康に味方し、徳川政権のもとで真田家興隆の礎を築いた。

胴に描かれるはしご梯子の図柄は「高いところにのぼる」という縁起のよさにちなんだもので、当時の戦国武将のデザイン感覚がよくあらわれている。



7 富士御神火文黒黄羅紗陣羽織 (伝 豊臣秀吉所用) (出品番号 51)

大阪城天守閣蔵

陣羽織とは、身分の高い武将が鎧の上にまとった服。布や革で作られたものが多く、主に戦場での防寒に用いられた。

この陣羽織は天下統一を果たした豊臣秀吉が使用したものと伝えられる。背中には、日本一高く、また古くから信仰の対象となっていた富士山が大胆にデザインされている。山をあらわす黄色はヨーロッパ製のラシャ。空や、山のふもとの水玉模様をあらわした黒の毛織物もヨーロッパ製で、襟や袖にはヨーロッパの衣服をまねたフリルがついている。

日本とヨーロッパとの貿易は16世紀中ごろから活発になり、それ以来ふたつの文化が融合した新しい工芸品が数多く作られた。その流行を支えたのは、秀吉のような天下人や戦国大名たちだった。

